

題材のABC

題材の

設定ガイドブック

教科書題材で考えよう

文・絵 阿部宏行 



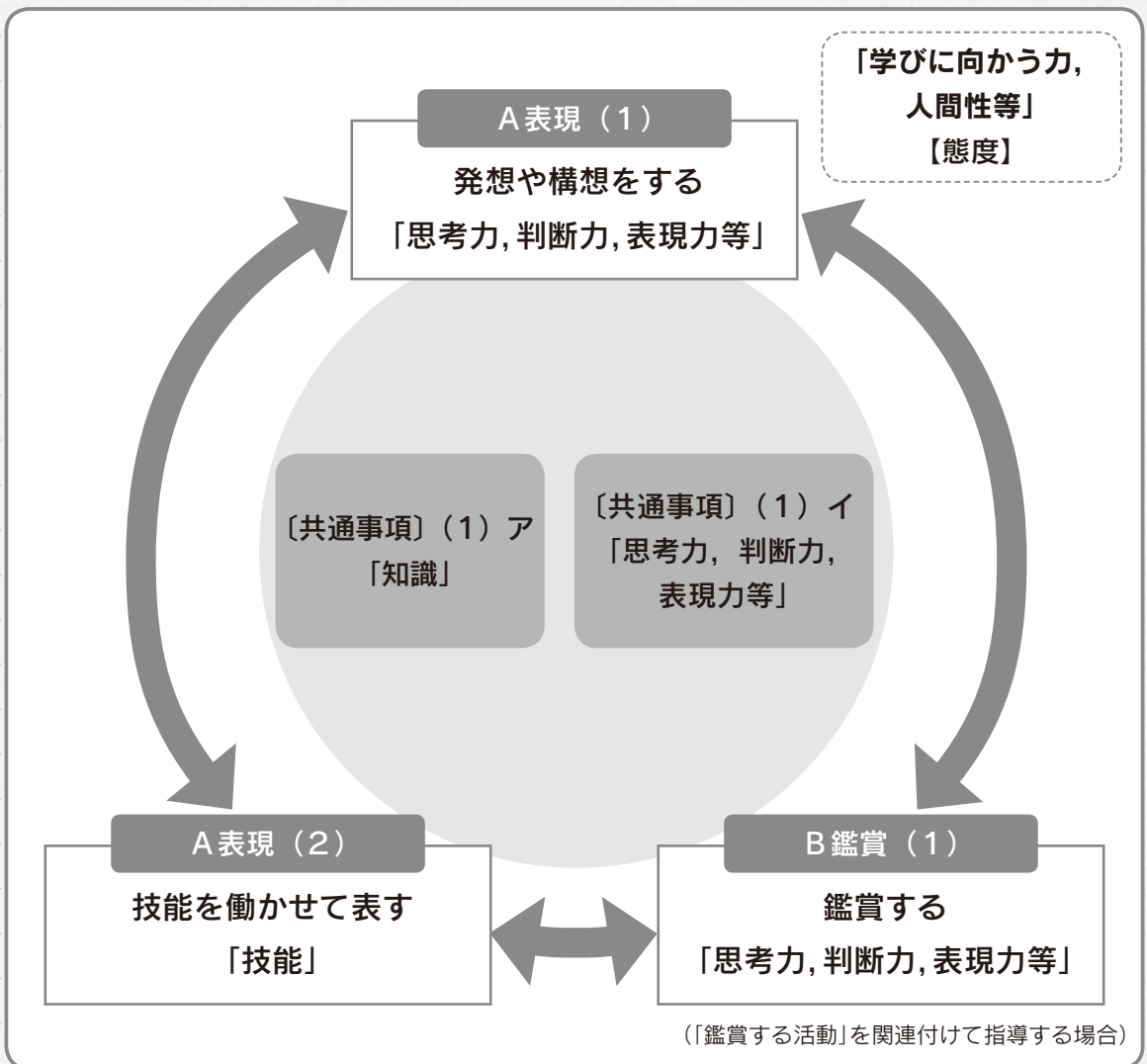
 未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

新学習指導要領に準拠した〈指導事項〉

新学習指導要領における教科の目標と学年の目標は、三つの柱から導きだされた(1)知識及び技能、(2)思考力、判断力、表現力等、(3)学びに向かう力、人間性等で示されています。しかし、各学年の内容には(3)学びに向かう力、人間性等について触れていません。これは、(3)学びに向かう力、人間性等は個々の授業や一つ一つの題材で育成するものではなく、もっと長い過程で形成されるという考えによるものです。つまり、「態度」を形成するという観点で、現行の「関心・意欲・態度」の育成と同様といえるでしょう。ですから、図1～3では三つの柱の(1)(2)の背景に(3)を位置付けています。

また、図1・2は岡田京子氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)の「新学習指導要領の全面実施に向けて 図画工作科」¹⁾を基に作成しています。

【図1】「各学年の目標及び内容」と〈指導事項〉の関係



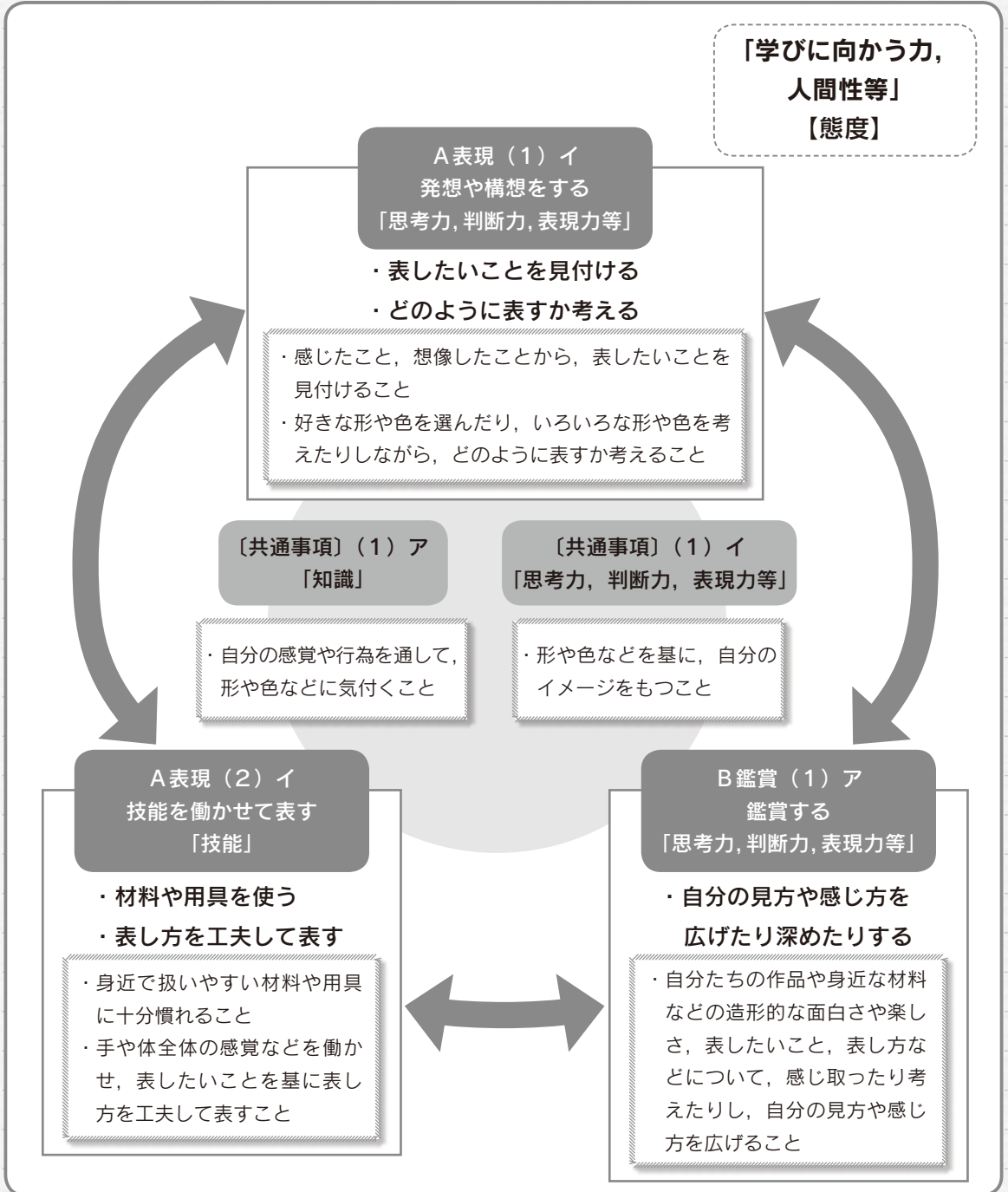
※中央教育審議会 答申(平成28年12月21日)の資料を基に作成

1) 『初等教育資料4月号 No.966』 東洋館出版社 2018 p.33

「絵や立体，工作に表す活動」の〈指導事項〉の設定例

それでは、実際に低学年の「絵や立体，工作に表す活動」の題材の設定を、前述の三つの柱を利用した図にあてはめて考えてみましょう(図2)。//// 枠内の文章は、新学習指導要領の各学年の目標や内容から関連する文言を選び、簡条書きで示しています。

【図2】

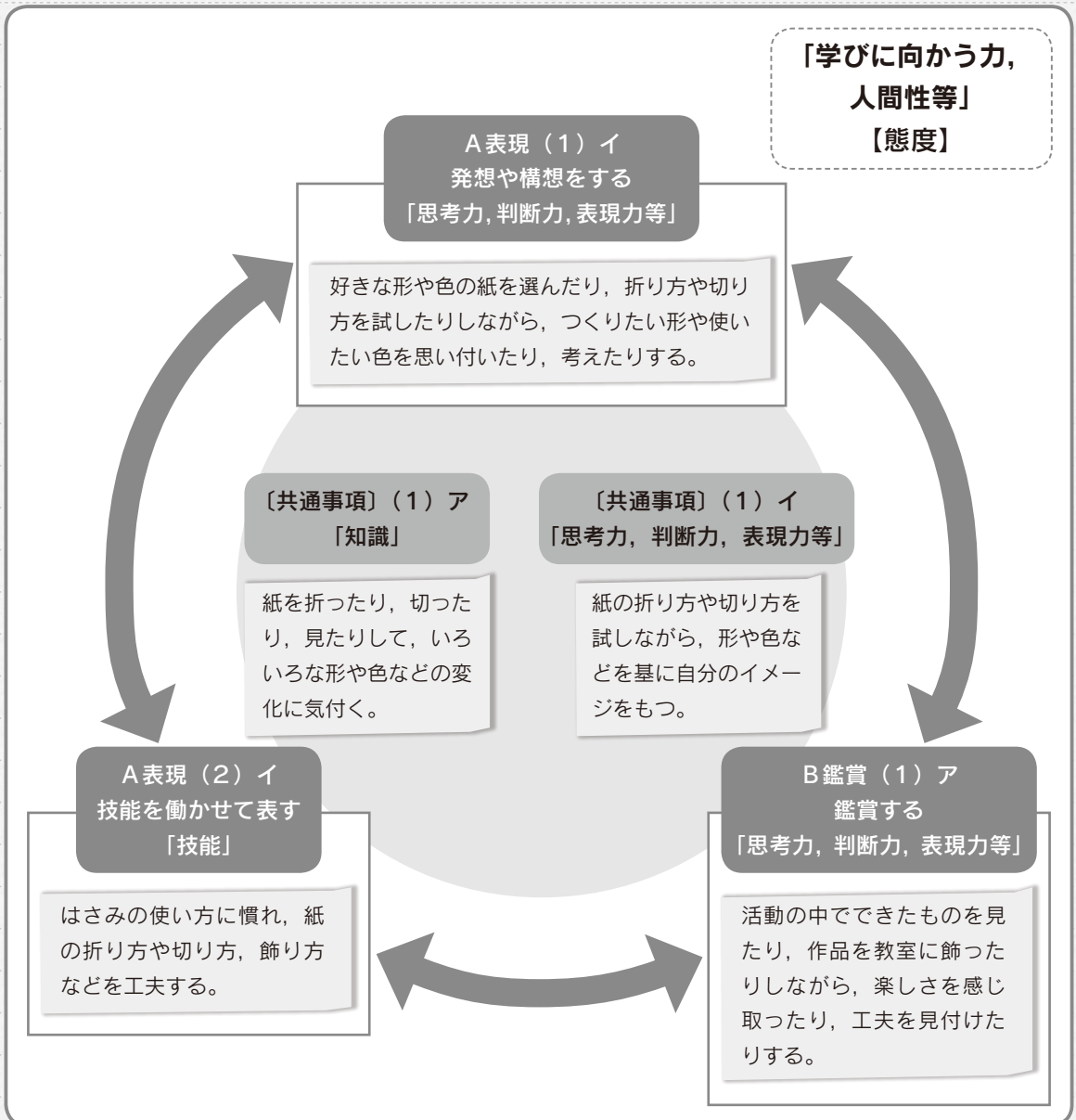


「チョキチョキかざり」の〈指導事項〉を設定してみよう

前ページ 図2の目標や内容を箇条書きにしたものを踏まえ、工作に表す活動である「チョキチョキ かざり」(『ずがこうさく 1・2上』日本文教出版 2015 p.10-11)の〈指導事項〉を考えてみましょう。〈指導事項〉は図3のふせんに示しています。

例えば図2で、「知識」は〔共通事項〕(1)ア「自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付くこと」とあります。「自分の感覚や行為を通して」「気付く」のですから、先生から指示された通りに紙を折ったり、切ったりするのではないことに注意しましょう。子ども自らが折ったり、切ったりしながら「いろいろな形や色など」に気付くことが大切です。

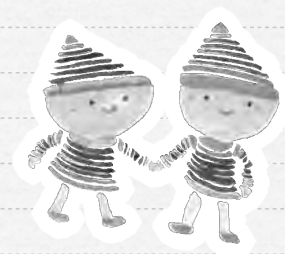
【図3】



①「チョコチョコきざり」〈指導事項〉を整理しよう

	資質・能力	〈指導事項〉例
「知識及び技能」	〔共通事項〕(1) ア 「知識」	紙を折ったり、切ったり、 <u>見たりして</u> 、いろいろな形や色などの変化に気付く。
	A 表現 (2) イ 「技能」	A 表現 (2) 技能を働かせて表す はさみの使い方に慣れ、紙の折り方や切り方、飾り方などを工夫する。
「思考力、判断力、表現力等」	A 表現 (1) イ 「思考力、判断力、表現力等」	A 表現 (1) 発想や構想をする 好きな形や色の紙を選んだり、折り方や切り方を試したりしながら、つくりたい形や使いたい色を思い付いたり、考えたりする。
	〔共通事項〕(1) イ 「思考力、判断力、表現力等」	紙の折り方や切り方を試しながら、形や色などを基に自分のイメージをもつ。
	B 鑑賞 (1) ア 「思考力、判断力、表現力等」	B 鑑賞 (1) 鑑賞する 活動の中でできたものを見たり、 <u>作品を教室に飾ったりしながら</u> 、楽しさを感じ取ったり、工夫を見付けたりする。

上の表は、前ページの図3を文章の一覧にしたものです。これは新学習指導要領解説¹⁾ p.23の内容と対応していますので、合わせてご覧ください。そこに示されている「鑑賞する活動」の〔共通事項〕(1)アについては、「見たり」という文言に含まれると考え、ここでは分けて示していません。これは〔共通事項〕を、表現及び鑑賞の活動の両方に働く資質・能力としているからです。この能力は表現や鑑賞の活動の中で育まれることになります。また、鑑賞の活動がより活発になるよう、できた作品を「教室に飾ったり」として、自分たちで飾るという行為を通して「感じ取ったり」「見付けたり」という思考力、判断力、表現力等の資質・能力が一層発揮されることを期待し、〈指導事項〉を設定しています。



1) 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』文部科学省 日本文教出版 2018

④指導の計画を考えよう

学年の目標 「知識及び技能」(低学年)

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付く【知識】とともに、手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする【技能】。

〔共通事項〕(1)ア 【知識】

紙を折ったり、切ったり、見たりして、いろいろな形や色などの変化に気付く。

◎気付きが生まれる対話的な場を設定する

「知識」については、つぶやきなどの自己内対話を前提にして、上記のように〈指導事項〉を設定しています。これは、折ったり、切ったり、見たりしながら、手ごたえなどの感覚や、形の変化などに「気付く」ことを大切にしているためです。「見たり」は自身の作品にとどまらず、友だちの作品のよさを感じ取ることも意図しています。友だちとの自然発生的な交流が生まれるように、互いに見合える座席の配置などの工夫が必要になります。合わせて材料の置き場所などの場の設定や、試しの活動ができる時間も確保するようにしましょう。また、活動の中で子どもが個別に気付いたことを整理し、必要に応じて全体に周知することも大切です。

A表現(2)イ 【技能】

はさみの使い方に慣れ、紙の折り方や切り方、飾り方などを工夫する。

◎創造的な行為を支える技能習熟の場を設定する

一連の活動の中で発揮される技能を、自分の思いを実現するための用具であるはさみの扱いの習熟と、「折り方」「切り方」「飾り方」といった工夫するポイントで位置付けています。これは、先生が折ったり切ったりする箇所を指定したり、あらかじめ切る箇所を紙に印刷しておいたりすることなどは適切な手立てではないことを示しています。子どもが自ら体験することで得られる創造的な資質・能力としての【技能】です。子ども自身が折ったり、切ったり、飾ったりすることに意味や価値があります。つまり、はさみに関する安全指導については確実に教える必要がありますが、先生が折り方や切り方を全て示す必要はありません。子どもが活動の過程で見つけた喜びを優先し、それを褒めたり認めたりすることが大切なのです。

繰り返し試すことが技能の習熟につながるため、扱いやすい大きさの紙をたくさん用意することや、同じ折り方や切り方だけでなく、様々な方法を試すことを促す声かけなどをするようにしましょう。

(2)造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想をしたり【A表現に関連】、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする【B鑑賞に関連】。

A表現(1)イ

【思考力、判断力、表現力等】

好きな形や色の紙を選んだり、折り方や切り方を試したりしながら、つくりたい形や使いたい色を思い付いたり、考えたりする。

◎試しの場や、豊富な色紙を選べる場を設定する

子どもたちは自分の好きな色を選ぶことや、いろいろな形や色に出会うことを通して、自分がつくりたい形ややってみたいことを考えていきます。そのためには、様々な折り方や切り方を試す時間や、材料を置いておく場の設定などが重要です。

思い付いたことを試す時間を長めに確保したり、子どもが自ら選ぶことのできるように、色紙の数量や種類を豊富に準備したりすることが、先生ができる支援といえるでしょう。

【共通事項】(1)イ

【思考力、判断力、表現力等】

紙の折り方や切り方を試しながら、形や色などを基に自分のイメージをもつ。

◎イメージを形成する場を設定する

上の〈指導事項〉は、活動の過程で生まれるイメージを指しています。最初から「こういう形をつくりたい」という明確なイメージがなくても、材料に触れたり、作りつつある作品などからイメージを思い付いたりすることがあります。ですので、十分に試すことができるよう、扱いやすい紙を用意しておくことが大切です。

また、友だちと互いに見合うことから得られるイメージもあります。友だちとできたものを見合う時間を確保するのはもちろん、紙置き場を教室の前後に設置し、材料を取りに行く途中で友だちの活動が自然と目に入るような工夫も考えられるでしょう。

B鑑賞(1)ア

【思考力、判断力、表現力等】

活動の中でできたものを見たり、作品を教室に飾ったりしながら、楽しさを感じ取ったり、工夫を見付けたりする。

◎ともに高め合う鑑賞の時間を設定する

鑑賞する活動を充実させるために、ここでは作品を飾る活動の時間を〈指導事項〉として位置付けています。ここでは、教室などに飾る自分や友だちの作品を互いに紹介し合うことで、関わり合いの場が生まれるように意図しています。飾り終わってからの振り返りの場という役割ももたせ、自他の作品のよさを発表することもできます。

自己肯定感や自尊感情は、他者との関わりの中で育れます。自立心も主体性も、単独では育ちません。これらが育つような場を設定することが、鑑賞を考える上での鍵となります。指導にあたっては、作りつつある作品やできあがった作品を見合う場や、作品を飾って教室が楽しくなったと感じる中で、それぞれの作品のよさに気付く時間や場を設定するように意識するとよいでしょう。

学年の目標 「学びに向かう力、人間性等」(低学年)

(3) 楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。

この目標は、一つの授業や題材を通して育むものではなく、いくつかの題材などを通して、「態度」として表れるものを想定しています。これまでの学習における実現状況を捉える「関心・意欲・態度」に属するものといえます。

ここまで、育成する資質・能力を基に学習指導要領などから〈指導事項〉を設定し、題材の目標を明確にしました。本来、学習指導案は、具体的な子どもの姿を想像し、予測して、その対応などを考えるものです。そこで具体的な指導場面を浮かべ、指導の計画を検討していくこととなります。先の〈指導事項〉で目標を明確にすることは、指導の計画の根拠も明確にすることなのです。

指導の計画で検討すべきことは、材料の種類や量、製作する時間、教室内の座席配置、材料や用具の場所と子どもの動線など多岐にわたります。また、子どもの実態把握、先生の立ち位置、子どものよさを記録する方法の確認など、指導上の留意点なども想定しておく必要があります。

これらを経て、授業は実施されます。つまり、指導の計画の根底には、子どもの表現の発達や実態の把握など、子ども理解がなければならないのです。

◎ 子どものよさや可能性を見取る評価を考えよう

具体的な見取りのための評価規準等については、まだ文部科学省から示されていませんが(平成30年12月現在)、図画工作の指導と評価は常に一体であることに変わりはありません。子どもの行為の背景にある資質・能力の表れを、よさや可能性として見取る先生のまなざしが必要です。

先生は「いいこと考えた」「これ見て!」「うーん。どうしよう」など、活動の過程で表れる子どもの姿を見取り、「少し待って子ども同士の高め合いに期待しよう」「材料面では補充をしよう」「この場面を動画で撮影して後の振り返りに使おう」などと指導につなげることが大切です。

そこには、子どもの思いを受け入れるという共感的な受容など「子どもを信じる」という先生自身の寛容さや人間性が重要な鍵となります。

ここでは平成27年度版の教科書題材を例に、三つの柱に基づいた〈指導事項〉を設定し、それぞれの資質・能力が発揮されるような指導の計画を考えてきました。

この他に、校内研修などで移行期に行われる題材を例にして、〈指導事項〉と指導の計画を設定してみるのもいいでしょう。授業改善のための目標の明確化や可視化は、単なる名目で終わらせてはいけません。未来を生きる子どもたちが、自らの生活や社会を豊かにするための資質・能力を思い描きながら、「いま・ここ」でできる授業の構築が、先生に課せられた命題であり、挑戦でもあると考えています。